

震災と原発事故から13年、
福島で、こころの病が多発していた

生きて 生きて 生きてる。

喪失と絶望の中で生きる人々と
ともに生きる医療従事者たちの記録

SINCE 1989
LeeWay
FROM AMERICA
-PRODUCT-

撮影：熊谷 裕達 西田 豊 前川 光生 助監督・撮影：鈴木 響 編集：前嶋 健治
オンラインエディター：中田 勇一朗 効果・整音：高木 創 音楽：渡邊 崇 音楽助手：中原 実優
制作・監督・撮影：島田 陽磨 製作：日本電波ニュース社 2024年 / 日本 / 113分 / カラー / ドキュメンタリー

「なんか生かされてんな」

「誰に？」

「それがわからんのですわ」

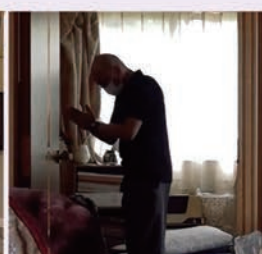


頑張れって言ったって
何を頑張ればいいの？

かつて沖縄で沖縄戦の遅発性PTSDを診ていた蟻塚医師は、福島でも今後、同じケースが増えていくのではと考えていた。
ある日、枕元に行方不明の夫が現れたと話す女性。「生きていていいんだ」という希望を持った時に人は泣ける」と蟻塚さんは話す。米倉さんは、息子を失った男性にジンギスカンを一緒に焼くことを提案。やがてそれぞれの人々に小さな変化が訪れていく。
喪失感や絶望に打ちのめされながらも日々を生きようとする人々と、それを支える医療従事者たちのドキュメンタリー。

震災と原発事故から13年。福島では時間を経てから発症する遅発性PTSDなど、こころの病が多発していた。若者の自殺率や児童虐待も増加。メンタルクリニックの院長、蟻塚亮二医師は連日、多くの患者たちと向き合い、その声に耳を傾ける。連携するNPOこころのケアセンターの米倉一磨さんも、こころの不調を訴える利用者たちの自宅訪問を重ねるなど日々、奔走していた。
津波で夫が行方不明のままの女性、原発事故で避難中に息子を自死で失い自殺未遂を繰り返す男性、避難生活が長引く中、妻が認知症になった夫婦など、患者や利用者たちのおかれた状況には震災と原発事故の影響が色濃くにじむ。

「希望を持ったときに、人は泣ける。」



5月25日(土)よりポレポレ東中野にて公開

料金 当日一般 1900/大学・専門・シニア 1200
高校・中学・障害者 1000 ※事前購入可能



ポレポレ東中野

03 3371 0088 pole2.co.jp
JR東中野駅西口改札北側出口より徒歩1分
郵営大江戸線A1出口より徒歩1分

